２０２４年（令和６年）夏号　No.37

日本ハリストス正教会教団　東日本主教々区宗務局

980-0021　仙台市青葉区中央 3-4-20
Tel (022)225-2744/Fax (022)224-3080
e-mail　orthodox@hyper.ocn.ne.jp

教会学校だより

播かれた種

The Eastern Diocese of the Orthodox Church in Japan

升天祭のイコン（15 世紀）

「神よ、爾は地の最下なる處に降りしアダムの性を己の中に新に作りて、今日凡の首領権柄の上に升せ給へり、蓋之を愛せしに因りて己と偕に坐せしめたり、憐むに因りて己に合せ、合せしに因りて偕に苦しめり、辜なく苦を受けて偕に榮を受けしめたり。無形の者は云へり、此の美しき人は誰ぞ、惟人のみならず、乃神及び人、二性を體合して現れし者なり。故に驚きたる天使等は装飾して門徒の四周に飛び、他の者は立ちて呼べり、ガリレヤの人よ、爾等より離れたる此のイイススは人にして神なり、神人は還來りて、生死者を審叛し、信者に諸罪の赦と大なる憐とを賜はん。」

（升天祭 リティヤのスティヒラ）

この升天祭のイコンは、天を表す上部と地を表す下部に分けられ、上部は整然としているのに対し、下部は中央の生神女を除いて使徒たちの混乱した様子が描かれている（昇天に立ち会っていないパウェルも描かれており、生神女を含む彼らは「教会」を表す）。この使徒たちの混乱は、10 日後に彼らに降る聖神によって教え導かれ、解決することとなる。下部の背景に記された丘陵地帯にはオリーブの木が描かれ、この出来事の舞台がオリーブ山（橄欖山/エレオン山）であることが示されている。

上部中央のハリストスはマンドルラと呼ばれる球体の中に描かれ、このマンドルラは天使たちによって担がれている。ただし、このハリストスは、昇天の姿であるとともに、再臨の姿でもある。なぜならハリストスの昇天に際し、二人の天使が使徒たちに「あなたがたを離れて天に上げられたイイススは、天に昇って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またお出でになる。」（聖使徒行実 1:11）と述べていたからである。

そして下部中央に描かれた生神女は、イイススの再臨を待つ教会全体を、使徒たちは聖神降臨を待つ忠実で求道的なハリスティアニンを表している。

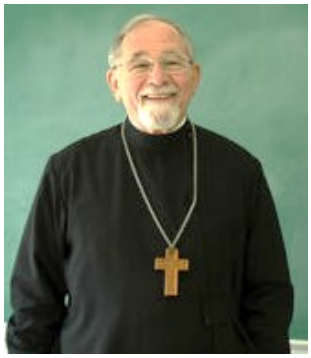
愛のための食事の節制

司祭　エフレム　後藤悠太

一年の中には、「大斎」以外にも長期にわたって食べ物を節制する期間があります。聖使徒ペトル・パウェル祭前の使徒の斎があり、生神女就寝祭の斎や降誕祭の斎もあります。長期の斎以外にも、水曜日や金曜日に関してはその多くの日が斎の日になります。しかし斎を前にして私たちは、それを信仰の成長の機会とするどころか、まるで斎などないかのように過ごしてしまったり、あるいは食事の節制をすることそれ自体に自己満足を感じたり、斎をしていない人を心の中で「どうしようもない人だ」と裁いたり、という有様です。いずれにしても信仰を深めるための斎とはとうてい言えない姿です。

これから引用させていただくのは、先に行われました北海道ブロックの誦経者研修会で参考資料としてお配りした文章の一部です。アメリカ正教会のトマス・ホプコ神父（2015年3月18日永眠）が書かれた文章です。この文章を読みますと、食事の節制も、その目的は「愛」にある、ということが良く分かるのではないでしょうか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・



師父たちは、斎の日であっても自分のもとに来る人々がいたら、食べ物を分け与えました。いえ、それだけではなく彼らと食事を共にしました。偉大な修道者の中には、食べ物を分け与えた相手の量よりもさらに多く飲食をした者もいました。訪れた人が気まずくならないように、という配慮です。また、訪れた人がまるでいつも斎をしていないかのように見えてしまう、ということがないようにという配慮です。聖大マカリオスと聖シソエスという修道生活を送った偉大な二人の聖人がいます。彼らについて人々はこのように忠告されていました。二人のもとに訪れてはいけない、またしかるべき目的があって訪れるにしても、飲食をできるだけ慎むように、と言われていたのです。なぜなら二人の聖人たちは、もし兄弟姉妹と共に食事を共にしたのなら、誰も人が見ていないところでは人と一緒に食べた分の二倍は斎をすることにしていたからです。共に一切れのパンを食べたのなら、独りになった時にはパンを二切れ我慢しました。人々との愛の交わりの中でぶどう酒を一杯飲んだのなら、独りになった時には水を二杯我慢しました。

二人の聖人たちが、人々になぜそのように実践されているのかと尋ねられた時、また特に兄弟たちとなぜ飲食をするのかと尋ねられた時、彼らは決まってイイススの言葉に言及するのでした。

「イオアンの弟子とファリセイとは、断食をしていた。そこで人々がきて、イイススに言った、『イオアンの弟子たちとファリセイの弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか』。するとイイススは言われた、『婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。』」

（マルコ 2:18-20）

二人の聖人は確信していました。自分を訪れて来る人は誰もがハリストスである、と。兄弟のうち最も小さい者にしたことは、主ご自身にしたのである、という教えをこの聖人たちは文字通り実践していました(マトフェイ 25:31-46)。彼らは信じていたのです。自分

を訪れてくる人は皆花婿であり、花婿が共にいる間は斎できない、と。しかし花婿が奪い去られる時が来ます。その時になって人は斎ができるようになるのです。聖人たちが秘かに斎した、というのはそういうことです(マトフェイ 6:18)。

聖人たちは人前で食べ、密かに斎したというのに、現代のクリスチャンである私たちが行っていることと言えば、これとは全く逆です。人前で斎し、密かに食べるという傾向にあります。斎期間中に教会の行事があったり、斎している友達の家に行ったり、逆にその友達が自分の家に来た時には斎します。けれども一人になった途端食べてしまうのです。そのような自分の行動を正当化するために言い訳をつくる、なんていうことは朝飯前です。

大切なことは、クリスチャンは人前に出たら敢えて斎を中断しなければいけない、ということではありません。斎期間中の夕食に肉を出すことによって偽善を避けなさい、と教会に忠告することでもありません。神父が斎期間中に家に尋ねてきたら、謙遜な気持ちでステーキを出して差し上げよう、ということでももちろんありません。むしろ大切なこととは、兄弟姉妹と共にいる時にはいつも、喜びを共にしていなければならない、ということです。兄弟姉妹の中に、そして兄弟姉妹が共にいるということに、花婿であるハリストスを見出さなければいけません。必要な時には、兄弟姉妹と祝いを共にしなければいけません。自分が斎している最中であっても、いつでも彼らを暖かく迎え入れなければいけません。人々が食べ、飲んでいたのなら、どんな時期にあっても私たちも食べ、飲まなければいけません。自分の食べるという行為によって人々にショックを与えてしまう場合、あるいは人々が寛大さを装って私たちを誘惑しようとしている場合でなければ、いつでも食べなければいけません。私たちは決して「聖人ぶった人」に思われてはいけません。そして一番重要なことは、斎は秘かにしなければいけない、ということです。節制の努力を人に見せてしまってはいけません。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「我等は務(つと)めて斎を以(もっ)て諸罪の汚(けがれ)より潔(きよ)められ、貧者(ひんじゃ)に於ける憐(あわれみ)と恵(めぐみ)とを以(もっ)て我等に大なる憐(あわれみ)を賜(たま)ふ新娶者(はなむこ)ハリストスの宮(みや)に入(い)らん。」　（乾酪週間の月曜日の晩課）

聖師父の言葉

あるとき、キュプロスの主教・聖エピファニオスは人を遣わし、師父ヒラリオンを招待して言った。「わたしたちが肉体を離れる前に対面できるよう、おいでください。」彼がエピファニオスのもとに着くと、彼らは互いに喜び合った。さて食事のとき、鳥肉が運ばれて来た。主教はそれを取ってヒラリオンに与えたが、ヒラリオンはこう言った。「お赦しください。わたしは修道服を身に着けて以来、肉を食べたことがないのです。」すると、主教は答えて言った。「わたしは、修道服を着て以来、誰であれ、わたしに反感を抱かせたまま、眠りに就かせたことはなく、またわたしも、人に反感を抱いたまま眠りに就いたことはありません。」長老は言った。「お赦しください。あなたの修道の姿は、わたしのものよりも優れています。」

あるとき、師父シルアノスと弟子のザカリアが、ある修道院に行った。人々は彼らが旅する前に、少し食事をさせた。さて、彼らは出発したが、弟子は道中で水を見つけ、飲もうとした。長老は言った。「ザカリヤよ、今日は断食日だ。」彼は答えた。「父よ、わたしたちは食事をしたではありませんか。」長老は語った。「われわれが食事をしたのは愛のわざだ。子よ、われわれは自らの断食を固く守ろう。」

「正教徒となって」

函館教会　アファナシー　藤崎裕之

▲誦経奉仕者研修会にて

昨年の 6 月に洗礼を受け正教徒となりました。私は 1962 年高知県高知市に生まれ、実家は明治時代から続くプロテスタントです。両親は熱心な信徒で、毎週教会に通っていました。私は教会付属の幼稚園、教会学校を経て同志社大学神学部に進学しました。先輩牧師たちの勧めもあって 1988 年に牧師となりました。2023 年 4 月に牧師隠退が認められたので 35 年間の奉職となります。正教徒としては少し異色の経歴かもしれません。

函館正教会に通うようになったのは新型コロナ蔓延の最中 2021 年です。常々、他のキリスト教会にも触れてみたいと思っていましたが、ちょうど教会の担任牧師を退いた時であり、この機会にと思っておりましたが、コロナ感染流行期に門戸を開いている教会は函館正教会だけでした。幸い、京都ハリストス正教会の信徒さんと知り合いでしたので、その方の紹介で函館正教会に通うこととなりました。

私自身は長いプロテスタント信仰の中で、少し行き詰まりを感じていました。私が属していた教団は、社会の色々な問題に取り組んでいく、そういう積極性が評価されるのでしょうが、時にはあまりに政治的になったり、正義感の押しつけがあったりと、個々人としては重苦しさを感じることが多かったと思います。他の教会に触れてみたいと思ったのは、そういう事情がありました。

また、若い頃から古代の教会教父に関心がありました。特に 3 世紀 4 世紀の教会教父は私に大きな影響を与えました。残念なことにプロテスタント教会では聖人や教父の教えについて話題になることなく、寂しい思いがありました。

初めて函館正教会の聖体礼儀に参祷した時は、まだ聖堂修復時期だったので、奉神礼は信徒会館で行われていました。ですからイコンや祭具は限られたものでしたが、それらを初めて目にした私には、驚きというか畏怖を感じる光景でした。司祭と会衆が一体となった祈りは西方系の教会では行われないので、とても感動的でした。また、聖歌もしかりです。

ただただ、驚きの連続だった初めての聖体礼儀でしたが、その中で神父さんから会衆に向かって発した言葉「神は善にして人を愛するもの」を聞いた瞬間に魂が揺さぶられるような思いがしました。それは、私の聖名である聖大アファナシーが繰り返し強調している「神の本性は善であり、また愛である」との教えそのものでした。その瞬間に正教会は古代教会教父の伝統に今も立ち続けているのだと確信したのです。

▲復活大祭十字行で大十字架を捧持する藤崎兄

それから 2 年くらいでしょうか、正教徒となって生涯を終えたいという思いが強くなり、洗礼を受ける決意を固めました。これからよろしくお願いします。

女性輔祭の復活

司祭　ステファン　内田圭一

アフリカ・ジンバブエ共和国の首都ハラレの正教会にて、30 代の既婚女性であるアンジェリック・モレン姉が輔祭に叙聖されました。叙聖は今年 5 月 2 日の聖大木曜日聖体礼儀にて、アレクサンドリアと全アフリカの総主教テオドロス聖下の承認の下、ジンバブエの府主教セラフィム座下により執行されました。叙聖時には〝アクシア！〟(「アクシオス」の女性形」)の歓声が響き渡りました。

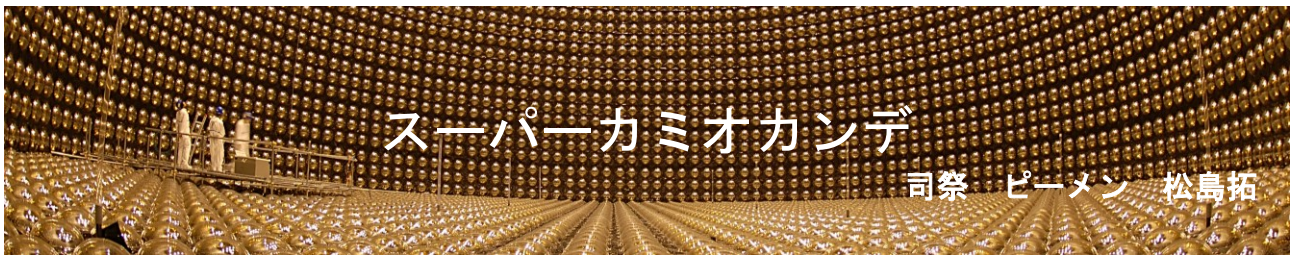
輔祭職は聖使徒行実 6 章に書かれている 7 人の叙聖から始まります。初代教会における輔祭の職掌は広く、共有財産の管理や生活必需品の分配、病者領聖を含む牧会ケア、慈善活動など教会のさまざまな働きを受け持っていました。女性の輔祭も多く登用されており、ロマ書 16 章に書かれている聖フィワを始め、聖ポプリヤ、聖ソフィア、金口イオアンの友人であった聖オリンピアダなどが知られています。しかし後に輔祭の役割は奉神礼に限定され、司祭の補助者・前段階に過ぎないと見做されるようになり、輔祭の数そのものが減っていきます。さらに 7 世紀頃から女性に対する不浄視が増大し、正教会では 11 世紀頃に女性輔祭は居なくなりました。(ただし 5 世紀に正教会と分かれたアルメニア使徒教会では女性輔祭の伝統が現在まで絶えることなく続いています。アルメニアの女性輔祭は高壇で連祷を唱えたり福音書を読み上げたりと男性輔祭と同じ役割を務めていて、「古代の女性輔祭は女性の洗礼の手伝いなど限定した職務しか持っていなかった」といった説への反論になります。)

輔祭に叙聖されたアンジェリック師は、聖体礼儀で福音書を読みあげ、聖爵を持って信者に領聖させています（輔祭による聖体授与はギリシャやアメリカでは珍しくない)。これまで行ってきた教会学校、女性グループや青年会の指導、貧困援助のための養鶏事業も継続していくとのことです。まさに新約聖書で称賛されている聖フィワや聖タビタ、聖プリスキラといった女性たちの働きを継承されていくことでしょう。「アクシア！」。

正教会は伝統的な教会です。ローマカトリックが離れるより以前に全てのキリスト教会が確認し一致した教義を「付け加えることも」「差し引くこともなく」守っています。

しかし、全ての習慣やしきたりまで全く変えられないということではありません。それらを区別せず「正教会はこうなんだ！」と決めつけるような言動がしばしば聞かれます。それに対して「そういうものだから仕方ないね」と諦めてしまったり、「私には合いません」と離れてしまうのは残念なことです。実際には初代教会には無かった女性蔑視や誤った科学知識に基づく価値観、帝国主義や民族主義などによって後から付け加えられた習慣やしきたりが現在の正教会にはいくつもあります。

守るべきものは守り、正すべきものは正す。それは学びと祈りによって可能になります。私たちの正教会をさらに良い教会にしましょう。



スーパーカミオカンデ

司祭　ピーメン　松島拓

つい先ごろ、東北地方でもオーロラが観測されて話題になっています。オーロラとは太陽から飛来した小さな粒のようなプラズマが地球の磁気に添って極地に降り注ぎ、大気と衝突することによって発光する現象です。実はオーロラの他にも宇宙からは日々たくさんの物質が地球に降り注いでいるのですが、それはあまりに小さく速いために人間が目で捉えることはできません。例えばニュートリノという素粒子は質量もゼロの可能性があり、飛来する速さも光速です。ですからニュートリノは本来人間が知覚することなどできるはずない素粒子です。

このニュートリノを検出するため、岐阜県の山奥に「スーパーカミオカンデ」という施設があります。スーパーカミオカンデは地下深くに大水槽を作り、そこに限りなく純粋な水を満たした構造をしています。厚い地盤に覆われているので宇宙や地球内部から飛来する普通の物質はスーパーカミオカンデには到達しませんが、極小のニュートリノなら地盤をすり抜けて大水槽を通過します。その時ごくまれに水分子に衝突し発光する現象をセンサーで捉えようというのがこの施設の目的です。他の現象を検出してしまっては意味がないため、「雑音」のまったくない地下深くに、まったく不純物の無い超純粋の水を用意しているのです。まさに「明鏡止水の境地」で目に見えない素粒子を検出しようという壮大な実験施設がスーパーカミオカンデです。

さて、前置きが長くなってしまいましたが。

復活祭までの大斎の時期を過ごす間、私たちの心もこのスーパーカミオカンデのようでなければ神からの「目に見えない」言葉を捉えることはできないのだろうと思うことがありました。私たちの心は日々さまざまな雑音の中にいます。欲望や執着心、怒りや不安。心の水鏡がかき乱されている間はなかなか神から降り注ぐメッセージを「検出」することができません。科学実験と同じように、雑音が混じったデータでは価値ある結果を得ることはできないのです。また科学では得られたデータをさらに慎重に精査し、残ったノイズと本物の現象を注意深く切り分けます。私たちの信仰におけるこの工程が斎と痛悔の意義です。私たちの心に去来する様々な思い、それを節制と祈りのフィルターにかけ、さらにそれが『怠惰』な思いではないか『愁悶』の心ではないか、あるいはその他悪い心によるのではないか（エフレムの祝文参照）と精査して、本当に神の心に添う思いを慎重に検出します。そのように丁寧に雑念を取り除き、心の揺らぎを鎮めようとしたときに観測されることはなんでしょうか。それは自分の弱さを自覚する謙遜さと神の憐みへの感謝なのではないかと思うのです。心を鎮めても鎮めても湧き上がってくる雑念、祈りの言葉を唱えることだけに集中しようとしても乱れる心、なかなか「明鏡止水」とはいきませんが、少なくとも自分の心に雑念が多いという観測結果は得られます。またその雑念が幸いにも減少するのならばそれは神の憐みに他ならないと気付きます。おそらくこの繰り返しが私たちの「心のスーパーカミオカンデ」をより高感度なセンサーとして進化させるのです。そして純粋な謙遜さと感謝の発光現象が次々と観測されるようになった時、私たちの心には大きな喜びが溢れ、心の底から自然に神への讃美が湧き上がってくる、そんな予感がするのです。

ゾーイーとソーティール

（作：ダヴィド水口）

ここは四つの川の流れる国。ゾーイー王女は、ガーナー城に住んでいた。お城の中では、どんな場所でも自由に歩き回ることができたが、一つだけ入ってはならない部屋があった。その部屋は禁断の部屋と呼ばれていた。

ある日、白いカラスが飛んできてゾーイーに言った。

「こんなにたくさん部屋があるのに、入ってはならない部屋がいくつもあるなんておかしいですね。もっと自由になればいいじゃありませんか。」

「あら、違いますわ。入ってはならない、ドアを開けてはならない部屋は一つだけですわ。」

「では、試しにドアだけ開けて見たらどうです？　ホラ、何も起きないでしょう。その部屋に入ったら、あなたは本当の意味で自由になれるのです。」

ゾーイーはカラスの言うことを信じた。そして禁断の部屋に入った。すると突然、自分を中心に世界が回り始めた。「なんてステキなんでしょう」とゾーイーが思った次の瞬間、世界は真っ暗になり、ゾーイーには何も見えなくなった。

それだけではない。手足がどうも重たい。暗闇にだんだん目が慣れてくると、ゾーイーは気づいた。手足が鎖に繋がれているということを。そして鎖一つ一つに文字が刻まれていることを。「貪欲」「妬み」「悲嘆」「奢り」「悶え」「高慢」「怠惰」「冷淡」などなど。そして手足に嵌められた錠には「死」。

そこは、実は、もはやお城ではなく、地下深いシェオールと呼ばれる場所だった。四つの川の国は天上にあった。しかし、今、ゾーイーは地上に、いや地下に落ちてしまった。ゾーイーは、自分の軽率さを嘆いた。時折、世界が自分を中心に回っているあの錯覚が訪れたが、すぐに暗闇にもどった。しかし、「必ずソーティールが迎えにくる」という慰めが与えられたため、ゾーイーは希望を失うことなくひたすら助けを待ち続けた。

それから 5541 年が経った。そしてとうとうソーティールがやってきた。大きな音がシェオールに響きわたり、光が暗闇を蹴散らした。ソーティールの力は、瞬く間にゾーイーを縛っていた鎖を解いた。手足は自由になった。ソーティールはゾーイーに言った。

「手をのばしなさい。ここから引き上げて天上に戻してあげよう。」

するとゾーイーは言った。

「そんなこと言わず、もっと簡単に、そう、私を抱きかかえるか、何かに乗せてください。」

「もちろん、それを行う力を私は持っている。しかし、私にはそれはできないのだよ。あなたの意志を無視して力づくで救うことはできないのだ。ただ手を伸ばしなさい。それがあなたの意志の現れだ。私はあなたの手首をしっかり握ってあげる。あなたは、私の手を握り返す必要もないし、しがみつくこともない。ただし、あなたが手を後ろに回したり、ただじっとしていたりすると、私はあなたを救えないのだ。」

ゾーイーは悟った。救いとは、一方的に与えられるものではなく、かと言って自分で勝ち取るものでもないことを。すなわち、ただ自分の意志と救う者の意志が一つになった時に実現するということを。

ゾーイーはためらうことなく、鎖が解かれたその手を伸ばした。ソーティールの手が手首をキュっと握るのを感じた。すると、その瞬間、ゾーイーは、ガーナー城の中に戻っていた。

〈北海道ブロック教会学校宿泊研修会〉

キャンプだホイ！　in 十勝

今年の「キャンプだホイ！」は十勝で開催。ホーストレッキング（馬に乗って自然の中を散策すること）、バードコール（鳥の鳴き声に似た音を出す楽器）作り、うどん打ち、サイクリング、バーベキューなど今年も盛りだくさん！

道外からの参加も大歓迎です。大人も子供も、友人・知人をさそって是非参加しよう！

実施日：7 月 31 日（水）～8 月 2 日（金）
開催地：十勝　音更町、帯広市
宿泊地：十勝エコロジーパーク
　　河東郡音更町十勝川温泉南１８丁目１
参加費：大　　人　　15,000 円
　　高校生以下　　無料
申込み：各所属教会か担当の釧路正教会まで

〈東北ブロック教会学校修養会〉

夏の盛岡子供会

例年行っている東北ブロック教会学校修養会（夏のキャンプ）を今年は参加しやすい日帰り企画として実施します。

日時：7 月 28 日（日）聖体礼儀終了後
場所：盛岡正教会境内地
費用：1,000 円（18 歳未満は無料）

聖体礼儀で一緒にお祈りをし、お祈りの後はみんなでバーベキュー。楽しいレクリエーションも企画中です。大勢の子供たちの参加をお待ちしています！もちろん大人も大歓迎。参加希望の方は 6 月末までに各教会の神父さんを通じて盛岡教会まで。

※交通費は教区から支給されます。また遠方からの参加で宿泊が必要な場合、未成年参加者とその家族の宿泊費は教区が負担します。